

第 72 回開学記念式典 学長挨拶

おはようございます。本日は第 72 回目の本学の開学記念日です。

京都西山学園理事長はじめ理事・評議員のみなさま、永観堂、誓願寺各本山のみなさま、本日はご多用の中、ご臨席いただき、ありがとうございます。

平素は、本学の教育活動に深いご理解とご協力を賜り、感謝いたします。

私は今、本学学生とともに、一堂に会して開学記念式典を挙げる喜びをかみしめております。昨年はコロナ禍のため教職員のみで開催でした。この感慨はひとしおです。

さて、粟生光明寺といえば、もみじの名所ですが、先週からいきなり寒くなり、梢の先が少し色づいて参りました。あのもみじの葉は、一枚として同じ色はありません。日光の当たる場所とそうでない場所、冷気の当たる場所とそうでないところ、幹からの距離の長短、今年の夏の降雨、色を決めるさまざまな要因がありそれぞれ異なっております。おなじように今日ここにおいでの方のみなさまも、さまざまな思いをもちながら、ご結縁くださっていると拝察します。

開学記念日というのは、誕生日と同じです。二度と戻ってこない時間を、くり返す円環状の暦の中で確認する行為ですが、一昨年と昨年、去年と今年、同じ人びとが集っている訳ではありません。今この場にあい集い、開学記念式典を挙げることは、この学校の原点に立ち帰って、この学校の未来とみなさまの人生を確認する意味があるのだと思います。

本学は『光明寺沿革誌』によると弘安 3 年（1280）「学寮」記録があるといわれます。つまり鎌倉時代から続いている、由緒ある学校です。740 年もの歴史がある学校は全国にも数えるほどしかありません。しかしその歴史は、平坦なものではなかったと思います。多くの先人たち、そして多くの卒業生たちの努力で維持されてきました。この学校は 740 年たった今でも、法然上人の弟子、西山上人の流れを汲む、お念仏の教えを伝える学校です。

仏教コース、国際経営コース、みらい創造コース、保育幼児教育コースに分かれていますが、建学の精神は共通です。それは「慈悲の心を学ぶ」ということです。仏教コースはもとより国際人の育成も、自分の未来開拓も、保育幼児教育の広がりも、仏の慈悲を学ぶという精神を核にしています。

では「仏の慈悲を学ぶ」とはなんですか？

さきほど読誦していただいた「道俗の時衆等」ではじまる善導大師の「帰三宝の偈」。その中頃に出てきます。

「仏の大悲心を学んで 長時（ちょうじ）無退（むたい）のひとに帰命したてまつる」とあります。

仏の大きな慈悲の心を学んで、長い間、忍耐強く修行し続けるひと、阿弥陀如来に帰命したてまつるといっています。

では「帰命」とはどういう意味なのでしょう。

西山上人は、命というのは、私のいのちでなくて、阿弥陀如来のいのち。私はほとけさまのいのちを生きている。人生とはそのことに気付くプロセスなんだという意味のことを仰っています。つまり、この学校のテーマは、「いのちを愛おしむ」というメッセージです。

一昨年一月から新型コロナウイルスの感染拡大は、人びとの暮らしを一変させました。相次ぐ緊急事態宣言の発出により、大学教育もリモート授業を余儀なくされ、保育士養成校では欠くべからざる実習も随分かわりました。

今年度初めからはじまったワクチンの接種は、七月、八月京都大学附属病院ではじめた職域接種を皮切りに、京都精華大学さまのご協力で 28 名、医療法人千春会のご厚意で若干名と漸次すすめて参りました。それでも感染の危険がなくなったわけではありませんし、これからさきも with コロナの時代は続きます。

本学では先日 10 月 11 日からほとんどの授業で対面授業を再開しておりますが、感染状況によっては、リモート授業に逆戻りする可能性も否定できません。

これほど、人との交わり方、コミュニケーションのとり方、教育のあり方、そして、いのちが問い直されている時代はないと思います。

本日は第 72 回開学記念日を記念して岩崎順子さまからご講演をいただきます。お話を拝聴して、よろこびと感謝でもって、みずからのいのちを愛おしむことができますように、そして皆様方のこれからの人生が、今日この場であい集ったことを、よろこびと感謝でうけとめられますよう、お祈り申し上げて学長の式辞といたします。